

向きあう力を高めるための自己理解、他者理解、状況対応力の涵養 －介護福祉士を目指す学生の職業意識を育むための教育－

重松義成¹，横尾恵美子²，森永牧子³，中村京子⁴

(¹西九州大学短期大学部，²聖隷クリストファ大学，³九州大谷短期大学，⁴福岡医療福祉大学)

(平成 23 年 12 月 22 日受理)

The cultivations of intrapersonal and interpersonal understandings and situational respond capabilities to enhance abilities to confront - Based on attitude surveys of nursing cares for those who try to become care workers -

Yoshinari SHIGEMATSU¹，Emiko YOKOO²，Makiko MORINAGA³，Kyoko NAKAMURA⁴

(¹*Nishikyushu University Junior College*，²*Seirei Christopher University*

³*Kyushu Ohtani Junior College*，⁴*Fukuoka Social Medical Welfare University*)

(Accepted December 22, 2011)

Abstract

In this research, based on the relationship between caring attitudes of students who try to become care worker and Emotional intelligence Quotient, I consider educational importance to cultivate abilities to face care workers. To enhance students' "abilities to face nursing care", only the skill for supporting interpersonal techniques isn't enough. Various skills like human and social skills are required. Therefore, I implemented questionnaire investigations targeted 82 students who had finished care practices at training facilities in S, F prefectures.

As to students' properties of emotional behaviors, it was clarified despite highness of intrapersonal understanding abilities, abilities of interpersonal understanding and of taking action to respond to various situations was low. As to correlations related with corresponding factors and fields of EQ and consciousnesses of care workers, mutual relations whose correlation coefficient was more than 4 were observed in each 3 field. Hereafter the education students understand movements of their minds, to promote better understandings of care receivers and to supply appropriate

livelihood supports in accordance with their states are important.

Key word : 人と向き合う力
自己理解
他者理解
状況対応力

I. はじめに

1. 研究の背景

介護福祉士、社会福祉士養成に携わっている教育者として、福祉専門職人材育成のあり方について「向きあう力を高めるための自己理解、他者理解、状況対応力の涵養」を課題に研究に取り組んできた。

涵養Ⅰでは、「対人援助を学ぶ学生のEQの傾向、EQと実習時におけるコミュニケーションとの関係性を調査分析し、コミュニケーション力をつけるための指導のあり方」等を探求した。また、涵養Ⅱでは「対人援助を学ぶ学生が利用者と向きあう力を高めるための教育のあり方」について実習後のアンケート調査より考察し、この結果、実習に対し達成感を強く感じている学生のEQは高いことが示唆された。

「向き合う力を高める」ことは、対人援助技術における、自己理解や他者理解の力を深め、自己覚知に優れることが必要になる。これは単なる技術指導だけで身につくものではなく、人間力を深めることにより涵養されていくのではないかと考えている。つまり、人間的スキル、社会人スキルなど様々な能力が求められる。

そこで、本研究では「介護福祉士を目指す学生の介護に関する意識とEQとの関係性から向き合う力を育む教育の重要性」について考察することとした。

2. EQについて

EQ (Emotional intelligence Quotient) とは、ゴールマン (Golman.D) が1995年「Emotional intelligence (邦訳『EQ～こころの知能指数』)」の中で定義した言葉であるが、この後、情動知能の研究が注目されるようになった。内山らは「これまでの伝統的知能概念では把握しきれない能力を示すものとして情動知能という言葉が用いられ…」¹⁾と情動知能について述べている。さらに、「知能指数 (IQ) に代表される知的な能力だけでなく、自分の感情やその感情に対する対応や適応などの情動能力が対人間、あるいは様々な状況社会において生じる複雑な問題について大きな役割を果たす」²⁾と述べている。

今回の調査指標として使用したEQS (Emotional Intelligence Scale) は、内山らより1997年に日本独自の情動知能尺度として開発された。EQSは、「自己対応」「対人対応」「状況対応」の3領域で構成され、さらに9つの対応因子、21の下位因子から構成され、質問項目は65となっている (表1)。

EQについては、教育分野や人材育成の分野で取り入れられ、企業研修などでも取り入れられることが多い。しかし、福祉・介護の分野においてその研究は少ない。

表1 EQSの構成概念表 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介ほか：EQSマニュアル、第1版7刷、株式会社実教教育出版、東京、2010 P23

領域	対応因子	下位因子
自己対応 (intrapersonal)	自己洞察 (self-awareness)	感情察知 (emotional awareness) 自己効力 (self-efficacy)
	自己動機付け (self-motivation)	粘り (perseverance) 熱意 (enthusiasm)
	自己コントロール (self-control)	自己決定 (self-decision) 自制心 (impulse control) 目標追求 (patience)
対人対応 (interpersonal)	共感性 (empathy)	喜びの共感 (sharing positive emotion) 悩みの共感 (sharing negative emotion)
	愛他心 (altruism)	配慮 (personal consideration) 自発的援助 (voluntary support)
	対人コントロール (interpersonal relationship)	人材活用 (personal management) 人づきあい (sociability) 協力 (cooperation)
状況対応 (situational)	状況洞察 (situational awareness)	決断 (decision making) 楽天主義 (optimism) 気配り (group consideration)
	リーダーシップ (leadership)	集団指導 (influence) 危機管理 (risk management)
	状況コントロール (flexibility)	機転性 (tactfulness) 適応性 (adaptability)

II. 研究方法

1. 研究対象者

本研究は、S県とF県にある介護福祉士養成施設を対象に調査を実施した。S県のB短期大学専攻科（1年課程・保育士資格取得者）9名、B短期大学生生活福祉学科（2年課程）1年生24名、2年生22名とF県のA短期大学専攻科の学生27名合計学生数82名である。

2. 研究期間

2009年12月から2月、2009年度の介護実習終了した学生に対し、講義内でアンケート調査を実施した。

3. 調査内容

①EQ調査については、尺度として妥当性、信頼性に認められているEQSを使用した。65項目について「全く当てはまらない」～「非常によく当てはまる」の5件法で回答する。

②介護職についての意識についての12項目を「思わない」から「強く思う」の5段階で回答する。

4. 倫理的配慮

調査が自由意志によるものであり拒否することが可能であり、個人を特定するものではなく、結果は本研究目的以外には使用しないことを口頭で確約した。

III. 研究結果

1. 学生の概要（表2）

学生82名のうち、男性23名（28%）、女性59名（72%）で、年齢は、19歳以下が15名（18.3%）、20歳が22名（26.8%）、21歳が30名（36.6%）、22歳以上が15名（18.3%）であった。学年別状況については、1年生が24名（29.3%）、2年生が22名（26.8%）、短期大学専攻科生が36名（43.9%）であった。

表2 学生の概要

性別	度数	%
男	23	28.0
女	59	72.0
合計	82	100.0
年齢	度数	%
19歳以下	15	18.3
20歳	22	26.8
21歳	30	36.6
22歳以上	15	18.3
合計	82	100.0
学年	度数	%
1年生	24	29.3
2年生	22	26.8
短大専攻科	36	43.9
合計	82	100.0

2. 介護職の意識に関する質問について（表3-1）

「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護職は人の役に立つ仕事だと思う」「介護職は誇りをもてる仕事だと思う」「福祉や介護に関心がある」の項目については $4.23 \leq \text{平均値} \leq 4.60$ 、最頻値は5であった。「高齢者や障害者に関心がある」の項目について平均値は4.22、最頻値は4であった。「就職は介護職を希望する」の項目の平均値は3.95、最頻値は5であった。

介護職での就職を「強く希望する（40.2%）」「希望する（24.4%）」となり、一方、「あまり思わない（2.4%）」「思わない（3.7%）」と介護職を希望しないものは、全体の約1割（6.1%）がにしか過ぎない。

表3-1 介護職の意識に関する質問項目

質問項目	平均値	最頻値
介護職はやりがいのある仕事だと思う	4.60	5
介護職は人の役に立つ仕事だと思う	4.57	5
介護職は誇りをもてる仕事だと思う	4.52	5
福祉や介護に関心がある	4.29	5
介護職は将来性のある仕事だと思う	4.23	5
高齢者や障害者に関心がある	4.22	4
就職は介護職を希望する	3.95	5
介護職は長く続けたいと思う	3.67	3
兄弟姉妹や友人に介護職を勧めたいと思う	3.04	3
介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う	2.88	3
介護職は社会的に評価されていると思う	2.84	2
介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う	2.81	3

表3に示すように「介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う」「介護職は社会的に評価されていると思う」「介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う」の質問項目について $2.81 \leq \text{平均値} \leq 2.88$ と他の項目より低く、「医師に従属する仕事」の最頻値は2、「看護師に従属する仕事」3となっている。

「医師・看護師に従属する仕事」の2つの質問項目に対して「強く思う」8名（9.8%）、「思う」15名（18.3%）と約3割（23名・28.1%）の学生が、介護の仕事は医師や看護師に従属する仕事であると感じているようである。（表3-2、3）

表 3-2 介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う

	度数	有効%
思わない	11	13.4
あまり思わない	19	23.2
ふつう	29	35.4
思う	15	18.3
強く思う	8	9.8
合計	82	100.0

表 3-3 介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う

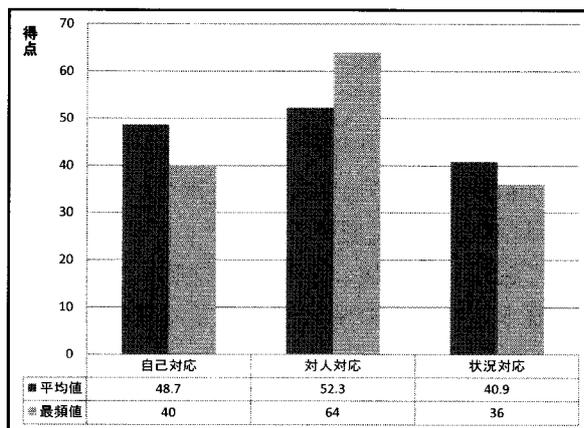
	度数	有効%
思わない	14	17.3
あまり思わない	18	22.2
ふつう	26	32.1
思う	15	18.5
強く思う	8	9.9
合計	81	100.0

3. 学生のEQの特徴(表4)

学生のEQについては学校別や、性別、年齢では有意な差は見られなかった。学年別では、専攻科について「誇りを持てる仕事、将来性」等については有意に高いが、「介護への就職希望」については有意に低い状況であった。

学生のEQの傾向は「対人対応」領域が最も高く、平均値52.3最頻値64となり、次いで「自己対応」の平均値48.7最頻値40、「状況対応」の平均値40.9、最頻値36のとなっている。対応領域の得点では「対人コントロール」「愛他心」は高いが、「リーダーシップ」「状況コントロール」は低くなっている。

表 4 学生のEQの状況



4. EQと介護意識の相関について(表5)

質問項目の「高齢者や障害者に関心がある」「福祉や介護に関心がある」「介護職は人の役に立つ仕事だと思う」「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護職は将来性のある仕事だと思う」「介護職は誇りを持てる

仕事だと思う」の全ての質問項目においてEQと0.4以上の相関がみられた。特に、「対人対応」領域では、「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護職は将来性のある仕事だと思う」の相関係数は0.40以上となっている。対人対応力が優れている人は介護職に対してやりがいや将来性を感じていることが判明した。

また、「自己対応」「状況対応」領域ともに「介護職は誇りを持てる仕事だと思う」「高齢者や障害者に関心がある」の相関係数は0.40以上となっている。自己対応力が高く、状況対応に臨機応変に対応できる学生は介護職について「役立つ仕事」「将来性がある」「誇りを持てる」と考えている。

さらに、「介護職は誇りをもてる仕事だと思う」「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護職は将来性のある仕事だと思う」の3つの質問項目について、EQSの3つの領域共に、相関係数0.35以上を示している。自己対応領域では「介護職は誇りを持てる仕事だと思う」が相関係数も高くなっている。対人対応領域では「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護職は将来性のある仕事だと思う」の質問についての相関係数は0.50以上を示し、今回の調査ではもっと高い数値を示した。

IV. 考 察

これまでの介護教育の中で学生が、介護職に対する肯定的な考え方を持つことができるために、「やりがい」「社会が求める」等を伝えていくことが重要であり、それに加え、自己の力を高めることが、介護職に対するやりがいを「対人対応」力の向上につながると捉えていた。学生のEQの傾向からもわかるように、「対人対応」力は身につけているが、自己を理解し、向きあう力である「自己対応」力や様々な状況におけるリーダーシップの発揮や、問題や課題に対応するためのリスクマネジメントなど状況に対応する行動が取れない「状況対応」力が不足している。この2つの力を高めていくことにより、「向きあう」力を向上させることができるのではないかと推測される。横尾も、介護従事者のEQの特徴として「対人対応」能力は優れているものの、「自己対応」「状況対応」能力は平均以下であり、「リーダーシップ」「洞察力」「状況コントロール」等の能力を示す「状況対応」はEQSの3領域の中では最も低い³⁾と述べている。

また、「介護職はやりがいのある仕事」「介護職は人の役に立つ仕事」「介護職は誇りをもてる仕事」「福祉や介護に関心がある」「高齢者や障害者に関心がある」という質問項目について平均値、最頻値とも高い数値結果であるが「介護職は長く続けたい」「兄弟姉妹や友人に介護職を勧めたい」「介護職は社会的に評価されている」の質問項目については、平均値、最頻値とも低い結果が

表5 EQの対応因子や領域と介護感の相関

領域	質問項目 対応因子	高齢者や 障害者に 関心がある	福祉や 介護に 関心がある	介護職は 人の役に 立つ仕事 だと思 う	介護職は やがてあ る仕事だ と思 う	介護職は 将来性 ある仕事 だと思 う	介護職は 誇りをも てる仕事 だと思 う	介護職は 社会的に 評価され ていると 思 う	介護の仕 事は医師 に所属す る仕事だ と思 う	介護の仕 事は看護 師に所属 する仕事 だと思 う	兄弟姉妹 や友人に 介護を勧 めたいと 思 う	就職は希 望する	介護職は 長く続け たいと思 う
自己対応	自己洞察	.197(n=74)	.236*(n=74)	.319** (n=74)	.349** (n=74)	.178(n=74)	.310** (n=74)	.064(n=74)	.134(n=74)	.087(n=74)	.240*(n=74)	.212(n=74)	.202(n=73)
	自己動機付け	.465** (n=72)	.465** (n=72)	.206(n=72)	.274*(n=72)	.336** (n=72)	.392** (n=72)	.093(n=72)	.026(n=72)	.101(n=71)	.178(n=72)	.214(n=72)	.317** (n=71)
	自己コントロール	.402** (n=73)	.407** (n=73)	.311** (n=73)	.333** (n=73)	.345** (n=73)	.436** (n=73)	.081(n=73)	.119(n=73)	.007(n=72)	.123(n=73)	.213(n=73)	.308** (n=72)
	自己対応	.423** (n=69)	.426** (n=69)	.342** (n=69)	.372** (n=69)	.337** (n=69)	.452** (n=69)	.002(n=69)	.114(n=69)	.008(n=69)	.207(n=69)	.249*(n=69)	.320** (n=69)
対人対応	共感性	.366** (n=74)	.483** (n=74)	.373** (n=74)	.470** (n=74)	.433** (n=74)	.413** (n=74)	.090(n=74)	.223(n=74)	.249*(n=74)	.328** (n=74)	.357** (n=74)	.325** (n=73)
	愛他心	.453** (n=74)	.483** (n=74)	.440** (n=74)	.479** (n=74)	.449** (n=74)	.484** (n=74)	.065(n=74)	.128(n=74)	.113(n=73)	.323** (n=74)	.244*(n=74)	.325** (n=73)
	対人コントロール	.226(n=75)	.248*(n=75)	.361** (n=75)	.439** (n=75)	.423** (n=75)	.378** (n=75)	.163(n=75)	.280*(n=75)	.235*(n=74)	.338** (n=75)	.262*(n=75)	.301** (n=74)
	対人対応	.402** (n=73)	.468** (n=73)	.476** (n=73)	.532** (n=73)	.512** (n=73)	.483** (n=73)	.133(n=73)	.251*(n=73)	.233*(n=72)	.374** (n=73)	.330** (n=73)	.359** (n=72)
状況対応	状況洞察	.410** (n=72)	.338** (n=72)	.322** (n=72)	.341** (n=72)	.342** (n=72)	.472** (n=72)	.017(n=72)	.211(n=72)	.060(n=71)	.059(n=72)	.162(n=72)	.281*(n=71)
	リーダーシップ	.360** (n=73)	.271*(n=73)	.144(n=73)	.212(n=73)	.211(n=73)	.280*(n=73)	.177(n=73)	.096(n=73)	.020(n=72)	.062(n=73)	.166(n=73)	.319** (n=72)
	状況コントロール	.357** (n=72)	.349*(n=72)	.219(n=72)	.357** (n=72)	.365** (n=72)	.297*(n=72)	.048(n=72)	.198(n=72)	.122(n=71)	.314** (n=72)	.219(n=72)	.285*(n=71)
	状況対応	.466** (n=68)	.397** (n=68)	.281*(n=68)	.367** (n=68)	.378** (n=68)	.415** (n=68)	.034(n=68)	.206(n=68)	.075(n=67)	.166(n=68)	.225(n=68)	.353** (n=67)
EQ	.485** (n=64)	.496** (n=64)	.434** (n=64)	.491** (n=64)	.473** (n=64)	.473** (n=64)	.489** (n=64)	.112(n=64)	.292*(n=64)	.194(n=64)	.301*(n=64)	.334** (n=64)	.416** (n=63)

現れている。

短期大学、専攻科の学びの中で、介護福祉に関する価値観を構築し、理想と使命感に燃えて入職するが、介護の現場の現実と理想とのギャップに戸惑いを覚えるのではなからうか。そして、この点が介護職の離職率の高さ、バーンアウトが多いことが関係するのではないかと思われる。

横尾は、特別養護老人ホーム従事者の職種間比較では介護職は生活相談員や介護支援専門員より「リーダーシップ」と「状況コントロール」が低い⁴⁾と述べている。現場の介護福祉士の状況対応力の向上を図るためにも、養成校を卒業する介護福祉士も同様に「状況対応」力のさらなる向上と習得が必要である。

さらに、「介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う」「介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う」の質問項目について、「強く思う」「思う」と回答した学生が約3割いることについて注目したい。介護福祉士養成における全体像としての「介護福祉専門職の専門性」や各教育科目の「知識・技術・価値」の重要性について教育を十分に行っている。このことについて、学生は十分に理解していると認識し、介護福祉士の専門性や介護福祉の価値・知識・技術を兼ね備えた他職種に従属するものではない「福祉専門職」であると回答すると推測していた。しかし、介護現場での介護実習終了後の本調査では、介護業務は「医師」や「看護師」に従属する仕事と感じていると回答した学生が約3割の結果となっている。実習現場における体験の中で学生自身が様々なことを学び経験する中でそのようなことを感じる場面があるのではないかと推測される。医療と看護そして生活支援（介護）の相違と共通点について認識するためにも、介護福祉・社会福祉の専門性、アイデンティティの確立が急がれる。

社会福祉士及び介護福祉士法第2条における介護福祉士の定義は「専門的知識及び技術をもつて、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと」とされ、国家資格保持者として専門性を持って、利用者の生活支援を行うものとして位置づけられている。しかし、実際の介護現場では、介護福祉士の業務は「同じ行為の繰り返し」「介護行為の習慣化」「ルーティンワーク化」されているのではなからうか。法律が定義するように利用者を主体とした生活支援を展開するためには、介護福祉士の質を向上させなければならない。それは、専門的知識や技術の習得だけでなく、価値の構築が求められる。

「向きあう力」を身につけることが、介護福祉士としての専門性、価値構築の一助ではなからうか。そのためにも、医療や看護と介護の相違を明確にし、介護福祉の

専門性と価値を学生自身が自ら身につけ、自己のアイデンティティの確立が重要である。そのためにはESQの3領域における「自己対応」力、「状況対応」力の身につけることが重要である。特に、本研究の結果からは「状況対応」力をつけ、その場の状況を把握し、臨機応変に柔軟性を持ってその場に求められる支援が提供できる力を構築するための教育を実践しなければならない。

自己と他者、集団を取り巻く状況の変化に堪える力、介護福祉に関する知識や技術を状況に応じて使い分ける力を学生が自ら身につけられるような教育の実践が重要である。そして、学生自身が自らの心の動きを知り、利用者理解を深め、状況に応じた適切な生活支援を提供できる教育を行うことが求められているのではなからうか。

和文抄録

本研究は、介護福祉士を目指す学生の介護に関する意識とEQ (Emotional intelligence Quotient) との関係性から向き合う力を育む教育の重要性について考察する。

学生の「向き合う力を高める」ためには、単に対人援助技術の技術だけでは図ることはできない。人間的スキル、社会人スキルなど様々な能力が求められる。そこで、S県とF県にある介護福祉士養成施設で介護実習を終了した学生82名を対象にアンケート調査を実施した。

学生の情動行動の特性は、相手に対しての向きあう力は高いが、自分自身に対する向きあう力は低く、様々な状況に対応する行動力の低さが明らかとなった。また、EQの対応因子や領域と介護意識に関する相関について、EQの3領域とも、相関係数0.40以上の相関が見られた。今後、学生自身が自らの心の動きを知り、利用者理解を深め、状況に応じた適切な生活支援を提供できる教育が重要である。

引用文献

- 1) 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介ほか:EQSマニュアル、第1版7刷、P.1、株式会社実教教育出版、東京、2010
- 2) 同上 P.2
- 3) 横尾恵美子:介護従事者のEQ (Emotional-intelligence Quotient) の傾向およびEQとバーンアウト (Burnout) の関係 国際医療福祉大学大学院博士課程学位論文2007年 P.35
- 4) 横尾恵美子:対人援助職のEQ (Emotional-intelligence Quotient) の傾向およびEQとバーンアウト (Burnout) に関する調査研究 非営利活動法人日本

参考文献

- 1) 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介ほか:EQS マニュアル、第1版7刷、株式会社実教教育出版、東京、2010
- 2) 高山直:EQ 入門 対人能力の磨き方、一版4刷、日本経済新聞出版社、東京、2009
- 3) ダニエル・ゴールマン 土屋京子訳:EQ 心の知能指数、第11刷、株式会社講談社、東京、1996